↑　神日出男大分県神社庁長より過疎地域等活性化推進施策指定神社の指定書を受け取る宮司

ともかき

第３０号

発　行：妻垣神社社務所
宇佐市安心院町妻垣 203 番地
発行日：令和 6 年 12 月 23 日
電　話：0978-44-2519
http:www.tumagakijinnjya.com

過疎地域等活性化推進施策継続決定

雨の中の秋季大祭

十月二十六・二十七日の二日間、恒例の秋季大祭（例大祭・神幸祭）が斎行されました。今年は十月に入って長雨が続き、祭典初日も朝から雨が降る天候でした。この状況に急遽、総代会を開き、祭典日程を協議した結果、地域を巡る神輿の巡幸については中止することを決定。お祭りを感じさせる境内の提灯や大幟などは取り止めとし、少しさみしくも感じましたが、祭典については妥協することなく、古儀に従って斎行されました。

そして翌二日目は時折晴れ間も見える曇り空の中、お神楽やもちまき、神幸祭お上りが予定通り実施することが出来ました。総代目代を始め関係各位には準備等ご苦労おかけしましたが、無事終えることができ、感謝申し上げる次第でございます。

二期連続の指定は当社が始めて

昨年に引き続き県神社庁神日出男庁長が秋季大祭初日の例大祭に参列。今期の過疎地域活性化推進施策指定の伝達式並びに助成金の交付式が執り行われました。この施策は三か年にわたり、当社が指定神社の指定を受け、活動を展開し、本年六月末をまで務めさせていただきました。しかし、まだまだやりたいことがある、今の流れを止めてはならないと、本施策の継続を神社庁へ申し上げ、神社庁理事会にて協議していただいた結果、引き続きの指定となりました。次の三カ年は前回の活動を基盤として、更なる発展へ繋がるよう、今一層の努力が必要となります。今後とも皆様方のご理解ご協力をお願い申し上げます。

50年ぶり　共鑰山
元宮参道再整備おこなう

かつて元宮足一騰宮へ詣でる道は地区内の神徳寺横にありました。文豪松本清張は『陸行水行』にて「百姓の家の前から山林の間を分け入って、胸を突くような急な坂を登った。石ころがごろごろしていて大そう登りにくい。樹が蔽い茂って日光も射さないから、しばらくはトンネルのように薄暗かった。」と記しているように悪路な山道でした。

現在の道は昭和五十年（一九七五）、氏子地区出身の矢野良宗氏(北九州市在住)や当時の安心院町長矢野武夫氏が中心となり、元宮を始め共鑰山の整備が実施されて完成したものです。しかし、その参道も、山から出る雨水により地面はえぐれ、道幅も土砂で狭くなるなど次第に荒れるようになりました。

今回、足一騰宮創祀二千六百九十年（令和五年）を契機に、数年かけてコツコツと備蓄した氏子崇敬者からの寄付金を活用して工事をおこないました。道は鋼さいバラスで敷き固め、雨水による地面の陥没を防げるようにしました。また道幅も自動車が通れるよう三メートル幅まで拡幅しました。

今回の工事は前回整備した箇所のみとなります。今後は竹や雑木の間伐、そして元宮までの残りの箇所に階段や手すりを設置するなど、誰もが安心して参拝できる環境づくりを引き続きおこなう予定です。そして、いずれの日にか再び、共鑰山において四月の元宮祭の祭事が行えるよう執り進めて参ります。

工事前

工事後

松本清張記念館友の会
久しぶりの文学散歩

福岡県北九州市の小倉城内には松本清張の偉大な業績の顧彰を目的に、平成十年に開館した施設「松本清張記念館」があります。記念館では清張の作品や資料を展示するだけではなく、清張の人柄や作品の研究もおこなうなど多彩な活動を展開しており、清張ファンで構成する友の会では年二回、清張ゆかりの地を見学する文学散歩を実施しています。

ようやくコロナが明け四年半ぶりの再開となった最初の目的地として、ゆかりの深い当社が選ばれました。これまでにも当社へは定期的に参拝戴いており、当日は二十三名が来社。矢野総代長より妻垣神社と清張さんのつながりなど、熱心に耳を傾けられていました。また参加者の中には事前に当社を予習される方もおられ、特別に披露した清張さんの手紙を食い入るように拝見されていました。

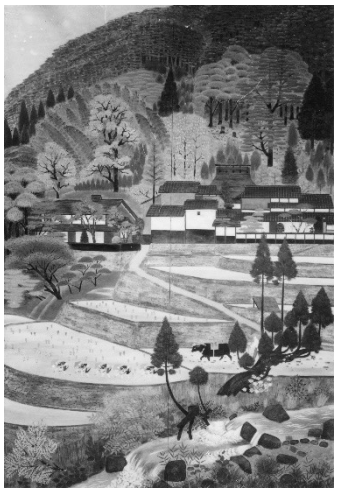
→　総代長の説明を熱心に聞く参加者たち

特集　「人みな神の御子」の思想のもと、多くの若者が学んだ

騰宮学館　誕生110年

No.3

今から１１０年前、妻垣神社境内に私学「騰宮学館」が創設された。終戦までの 30 数年、この学び舎を巣立った学生達は２０００名を越える。その中で２名を紹介する。



→ 初入選した「雲ヶ畑五月」

本広　禮（もとひろ　れい）　帝展に幾度も入選し、その才能は福田以上

明治 39 年、愛媛県松山市に生まれ、父善兵衛の勤めの関係で福岡県小倉市(北九州市)にて幼少を過ごしたが、父の死去により、母の実家の安心院龍王村野山に移り住んだ。そこで林正木館長に資質を見込まれ、家族同様に育てられ、騰宮学館を経て、大分県師範学校に入るなど手厚い支援を受けた。

師範学校では**首藤雨郊**と出会い、のちに京都市立絵画専門学校に進学。専門学校では首藤と共に大分市出身の**福田平八郎**の薫陶を受け、在学中の昭和 7 年、**「雲ヶ畑五月」が帝展に入選**。続いて「琴」「菊」も入選するなど、その才能は福田以上とも称されていたが、結核を患い、郷里安心院の林家で療養中の昭和 12 年 5 月、31 歳の若さで没した。葬儀には福田や首藤たちも参列し、その死を嘆き悲しんだという。

→ 本広禮の墓前にて、林館長を始め友人たちが早い死を悲しむ。

→「菊」

→　友人である首藤雨郊と共に山陰地方を歩いた際の姿。その時したためた絵を用いて紀行文「山陰行脚絵巻」を首藤と共同製作する。

写真提供　　大分市美術館

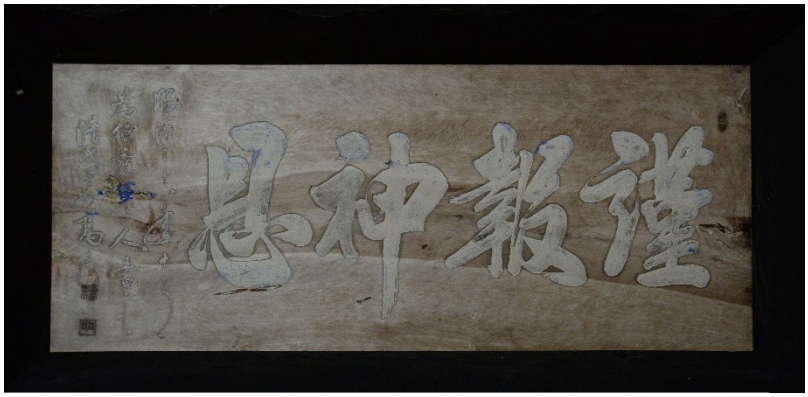
宋　晳來（ソン　ソライ）　昭和十七年卒

「人皆神の御子」の精神により、朝鮮からも宋氏を始め七名の学生が学館で学んだ。宋氏は他の学生と共に寄宿舎に下宿し、林館長が亡くなるまでの一年半、薫陶を受け、教員の資格を取得。故郷である大韓民国に戻ってからは、漢陽大学の教授にも就任した。

終戦後、学館は閉校となり、卒業生で組織する騰宮会が発足。昭和六十二年七月、校舎跡地に待望の記念碑が建立された。その碑の中央に掲げられた黒御影石は、宋氏は「今日、自分があるのは学館のおかげである」と、石の調達、碑銘碑文・揮毫・刻字に至るまで韓国の一流の学者や工務店を自身で手配し、ソウルから安心院まで電車と船に乗せて運搬したのである。また宋氏は八幡信仰の第一人者である中野幡能（別府大学教授）氏とも交流があり、騰宮学館を再興の話をよくしていたようである。

←騰宮会では年に一度、林館長の遺徳を偲んで、慰霊祭を斎行。学館卒業の妻垣神社宮司（小野勲、藤井武光）が斎主を務めた。

日露戦争開戦 120 年
戦争のない世の中へ　祈りを捧げる祈願祭



拝殿右手に掲げられている征露軍人凱旋記念奉納額

「謹報神恩」　謹んで神の恩に報いる

明治 39 年(1906)2 月 11 日　征露軍人凱旋奉告及平和克復報告祭を斎行するにあたり、凱旋した氏子 25 名によって奉納されたもの。

令和 6 年は日露戦争開戦 120 年となる。明治 37 年(1904)、約 2 年に及ぶ大国ロシアとの戦争には宇佐郡(現宇佐市)より約 3000 人が出兵し、安心院 5 村からは 276 名が出征した。

彼らは小倉第 12 師団第 14 連隊に編入し、朝鮮仁川に上陸。清国九連城、賽馬集、本溪湖、旅順の要塞へ侵攻するが容易ではなく、多くの戦死者を出すこととなり、翌年 5 月のバルチック艦隊との日本海海戦勝利によって、辛くも勝利することができたのである。

この戦争においての大分県戦没者数は 1046 人。そのうち宇佐両院は 11 名　(安心院町 9 名、院内町 5 名)がその尊い命を捧げた。その後、日清日露で戦死した者たちを慰霊する施設建設の気運が高まり、明治 44 年、神社境内に大忠魂碑が建設され、大招魂祭（慰霊祭）が斎行された。これが今に続く 8 月の平和祈願祭である。

出征する多く者は氏神さまに詣で武運長久を祈願している。そして無事凱旋できた際には、その御礼として神社に鳥居や絵馬などを奉納している。しかしその後、再び戦争へと駆り出され、戦場で散ったものも数多くいる。

今も尚、世界中では戦争が続いている。我々は平和であることのありがたさ、そして戦争の悲惨さを、祈りを通じて 1 人でも多くの人に伝えていかねばならない。

日露戦争　安心院 5 村出征者及び戦没者

	出征者	戦死者	
安心院村	５６人	島田喜代松	明治 38 年 9/13
佐田村	５７人	賀来由太郎	明治 37 年 10/11
		岩男荒之助	明治 37 年 11/25
		葛城　　茂	明治 37 年 10/22
		江藤　作平	明治 37 年 11/17
津房村	５８人	伊福　　豊	明治 37 年 11/20
竜王村	４９人	口原　豊造	明治 37 年 10/11
		河野三次郎	明治 38 年 8/28
明治村	５６人	井川　藤七	明治 38 年 8/ 9

令和7年、宇佐宮行幸会 1260 年を迎えるにあたり、行幸会道の活用を調査

豊の国千年ロマン観光圏

↑　**行幸会神鉾**

左側の小ぶりの鉾は昭和 46 年に奉納のもの。
右側の鉾は元和 2 年（1616）に奉納のものであり、
当社へは 3 柱の神々に 1 本ずつ奉納される。

別府市から県北一帯地域の歴史・文化・暮らしをテーマに観光地域づくりをおこなっている豊の国千年ロマン観光圏では 11/13～15 の 3 日間、宇佐宮行幸会の道を辿るサイクリングツアーを実施。当社にも立ち寄られ、宮司より行幸会の説明や、当時、宇佐宮より奉納された神鉾をご覧戴きました。

そもそも行幸会とは宇佐宮の二大特殊神事の一つで、御神体となる薦枕を新調し、所縁のある八社を巡り、神様の神威ご発揚を祈る神事であり、妻垣神社は 7 番目の巡幸となります。その行幸会も昭和 46 年に略儀で斎行されて以降中断しています。参加者は当時の人々へ思いを寄せつつ、全行程 160km を 3 日間で走行し、関連神社全てを巡りました。来年は行幸会を斎行してより 1260 年の節目の年となります。観光圏では今回のツアーを軸に事業を実施する予定だそうです。